

学園叛乱の原点

(明大助手共闘の歩みを中心として)

明大助手共闘編

目次

- 一 はしがき
- 二 一〇・四以降の状況
- 三 学園叛乱の個別性と普遍性
- 四 知的独占組織——教授会の内幕
- 五 自己否定の思想
- 六 占拠の思想
- 七 大学闘争の思想性
- 八 教育・研究の内幕(各別別)
- 九 学園叛乱と自己のかかわり
- レポーター A
- レポーター B
- レポーター C
- レポーター D

- 一〇 教職員組合の批判(一弾・二弾・三弾)
- 一一 何をどうするか……評議会運動の展望
- 一二 助手共闘のピラ・声明文(資料)
- 一三 (付)逮捕者の心得

助手共闘資料編集部並びに抄筆者

友田 仁	伊藤 清
木崎 卓平	石川 喜雄
島倉 弘文	小峰 康次
工藤 肇	室田 明彦
山下 謙幸	立花 輝一
後藤 正幸	中村 幸安

はしがき

われわれ助手は、全面的闘争準備が提起されたきわめてすぐれた質をもった問題にたいし、遅れながらも自らの問題として自己の存在をわけて発言し、応待できるように努めた。しかし、提起されている問題の本質が人間存在にもかかわる質をもったものであるが故に、一方は自己の内部において思想の深化として目的意識的に実践しなければならぬし、他方、この運動は階級闘争としての質をもっているが故に、きわめて組織論的にも運動論的にも厳密な討議が課せなければならぬ面をもっている。

われわれ自身は、過去何年かにわたって実験助手問題と取組んできた。しかし、結果的にはこの何年間かは全く空白であった過ぎない。実験助手というものは、身分は教員であるが、教育・研究の面では常に指導教授の元で業務に従事するのが通常になっている。従前と現実の間にはなほだしいギャップの存在は云々でもない。われわれ実験助手は、教授会に対して、個別学部長に対しては断えず、組織として

では、唯一われわれの正当な「人間権利」の行使できる者の教職員組合を通じて運動を展開してきた。

この実験助手問題というのは単なる待遇改善運動としてではなく、学問研究におよそ関係のない大学のヒエラルキーを全面的に否定するものとして、換言すれば、近代科学、テクノロジーの自律発展の側面からみても何ら科学性をもちえない現在の大学のヒエラルキーを根底的に否定するものとして存在していた。しかし、われわれの諸要求は今日まで、ことごとく拒否から理事会からも、教授会からもしりぞけられてきた。このことの原因を、われわれの闘いの弱さとしてかたづけしえなかつたわれわれは、最近になって、闘う学生諸君から提起された問いを謀介環として、本質的に包括することに成功した。この大学におけるヒエラルキーそのものが、現在の大学紛争の元凶であり、このヒエラルキーこそ、資本制分業社会において、大学教授が自らの社会的地位・物質的豊盛を守るために、(知的労働力商品の再生産機構において)大学社会に設計された独占のための階級的装置なのである。したがって、これまでのわれわれの要求が、しりぞけられたのは、財源の問題などではなく、知的独占の地位に損害を及ぼすとす教授の物質的豊盛に脅かせる者に対しては、ときにはそれが権力であるとうと抵抗することがある(今回の大学立法反対のよう)。実は、われわれの要求ははかならぬこの教授会強者の抵抗によってしりぞけられてきたということに認識することができた。自らが教育と研究の大半の作業を院生・助手にやらせ、予備研究者の階級の上に君臨してきた者に対して攻撃が開始されているのです。しかし、このヒエラルキーこそ、体制の内なるわれわれ自身が支えてきたことに気付いたときからわれわれの闘いが始まったのです。

或る意味では、唯一われわれの発言の場として存在する教職員組合そのものが、教授の自己保身の装置として、あるいは大学ヒエラルキーの維持装置として機能してきたことを指摘しなければならぬ。

われわれは、真に「人間解放」を志向し、それをなして初めて、われわれの研究が「人類に奉仕する」学問を捉え直すことができると考えている。人間社会における民族支配・階級支配を止揚することなくして単なる一個人の頭の中だけの意識をもって、自らの研究を「人民の学問」とすることは全く不可能だと云うことを自覚すべきだと考えます。われわれは被害者ではない。明らかに加害者として存在していたことを認識し、自己の日常性を否定する必要があると思えます。

肉体労働者が、気がかずに「生きるため」に工場で作っていた「商品」が、同じく労働者としていたわれわれ、「自らの解放」のために闘っているベトナム人民を殺すために使われていると知った日から、労働者は「生きるために働いている」ことが、同じく働いている労働者を殺していることを、どうしたら解決できるだろうか……。

資本主義は自由と競争を原理としていると云うが、この競争は他人の犠牲による自己の繁栄を意味し、しかも生産手段の私的所有を前提とするとしたら、あなたはどうか……。

われわれは、自己を研究学徒として規定しています。したがって、研究なしにわれわれの存在はないのです。しかし、この研究そのものが、どのようなものであれ現在の体制を支えているとしたら、われわれは、相対的な矛盾の解決・止揚を個別研究を通してやると共に、他方、絶対的な矛盾の止揚のために反体制運動を進めなければならないと考えます。われわれは、以上の如き立場と意識で運動をやっていきます。そしてこの間、われわれが自らの思想として深化したものを、公にすることによって、「在るべき」大学の姿を求めつつ運動している人たちの討論を呼び起していきたいと考え、ここに分想執筆して文章を作成した。